



No. 173

ティークレイク

Tea Break

人形町から浜町河岸に

会員 三宅 正夫

東京の町名で例えば笹笠町、霞町、材木町等一寸乙なもの消え失せ、赤坂見附、溜池、馬喰町（バクロウ）等一読して昔大体どんな処だったか判る処もあるが、では人形町は？その昔浄瑠璃による操り人形の芝居小屋が数軒あり、ここで使われていた人形の製作と修理とに当った人形師たちは人形細工と人形の販売を業としていた。江戸時代には遊廓と劇場街とで現代の新宿と同じような一大歓楽地帯。遊廓とは吉原のことで現在の人形町2丁目から日本橋富沢町にかけて元和3年（1617）に開設されたが、明暦3年（1657）に大火で消失し、浅草に移転。一方中村座、市村座で歌舞伎を上演。天保の改革で浅草猿若町に移るまでの約200年間、現在の人形町3丁目の西側にあった。

都営浅草線「人形町駅」下車、出口A5を出ると左手が人形町交差点。薬屋前の車道際に高さ約1メートルの「史跡玄治店」（日本橋人形町3-8）の石碑が立っている。「しがねえ恋の情が仇、・・・死んだと思ったお富とは、お釈迦さまでも気がつくめえ。・・・」の名せりふを思い出させる。江戸の商家の若旦那、与三郎は木更津で地元の親分の愛人、お富を見初め、そのため顔を初め全身34ヶ所の切傷を受け、ゆすり、たかりを生業とする身に落ちぶれた。入水自殺した筈のお富が生きて他人の囲われ者になっていたことに驚きを受けた、という筋書。芝居では「源氏店」（幕府をはばかって江戸を鎌倉にした）。長唄の家元四代目芳村伊三郎の若い日のエピソードを初めは講談に、更に3代目瀬川如皐（ジョコウ）によって歌舞伎に書下された。与話情浮名横櫛（ヨワナサケウキナノヨコグシ）の名で嘉永6年（1853）3月、中村座で八代目市川団十郎の与三郎、四代目尾上菊五郎のお富で初演。大正から昭和にかけて十五代目市村羽左

衛門、六代目尾上梅幸の夫婦役者の蝙蝠安の四代目尾上松助を加えたトリオの名演技が「切られ与三」を更に有名にした（「江戸東京物語」都心編、新潮社、1993年）。

玄治店碑を後に交差点を越えて、幟の立つ賑やかな人形町通り（玄治店碑のある通り）を数十歩で大観音寺。「大」というから大きいかと思えば小さいもの。江戸三十三観音の第三番札所。そのすぐ近くに「からくり櫓」。高さ約4メートル。夏の子供の行水、冬の雪夜のそば等四季の絵やら、「は組」の火消人形が飾ってある。上記交差点から約400メートルで有名な水天宮。文治元年（1185）壇の浦で平家は海に沈んだが、建礼門院に仕えていた按察使（アゼチ）の局は、「死なずに平家一門の霊を慰めよ」との院の説得で九州の久留米まで落ちのび、其処で安徳天皇、その母建礼門院、その祖母二位の尼3人の慰霊のため作ったのが水天宮。藩主（有馬氏）が文政元年（1818）その分社を港区江戸藩邸に造営。六代目藩主の江戸入りに際し、五代将軍綱吉から譲り受けた愛犬を藩主の駕籠につないだことが評判となり、有馬の殿様といえは犬となり、犬といえは安産、安産は女の願い・・・と回り、また建礼門院等3人を祀っていることから水天宮は女性の味方、幼子の味方、安産の神という連鎖となった。拝殿に鈴を鳴らす「鈴の緒」と呼ばれる紐が下がっているが、ある日参拝した妊婦が古くなった緒の御下りをもって腹帯にしたところ非常に安産であったという話がどこからともなく伝わり、これが御利益にはづみをつけた（「東京のお寺神社謎とき散歩」岸乃青柳著、広済堂出版）。15分置きに御祓いの呼込アナウンス、外国人一家も神前で写真撮影。

約200メートル戻った交差点で直交する道は甘酒横

丁。右折。豆腐，親子丼，しのだ寿司，御膳鮭所，鯛焼本舗，大福まんじゅう，瓦煎餅，藪そば等の名店が軒を並べる。三味線のバチを売る店の前の立札に曰く「明治の初め頃にこの横丁の入口の南側に尾張屋という甘酒屋があったことから昔は甘酒横丁と呼ばれていた。当時の横丁は今より南に位置しており道巾も狭い小路であった。・・・関東大震災の区画整理で現在のような道巾（10メートル）になり呼名も甘酒横丁と親しまれ人々に呼びつがれている」と。約300メートルで弁慶像の建つ浜町緑道と交差。更に100メートルで広い清洲橋通り。その角に聳える約30階建のモダンで大きなビルは明治座。明治座沿いで正面にしょんべん小僧の建つ銀杏並木（約100メートル）を通りぬけた突当りは，隅田川沿いの浜町公園。

隅田川岸沿いに走る高速道路が右折して川を渡り初

める右岸地点から上流に向って川沿いに両国橋に至る道が「浜町河岸通り」。明治20年浜町の酔月楼の花井お梅が箱屋峰吉を刺し大さわぎとなった。お梅は役者の沢村源之助との恋に破れ，峰吉がその仲介を怠ったことを根にもって峰吉を殺した。河竹黙阿弥は翌年（明治21年）「月梅薫籠夜（ツキトウメカオルオボロヨ）」を五代目菊五郎を主人公に仕立て大当りをとった。その後川口松太郎の「明治一代女」の取上げられ「ういたういたの浜町河岸に，うかれ柳のはづかしさ・・・」の流行歌に・・・（「隅田川を歩く」林順信著JTB）。そんな悖を想像する因となるのは僅かに残っている貧相な柳並木のみ。因に「浜町」なる地名は海浜を埋め立てた土地の意で，山県有朋のお声かかりで料亭ができて以来柳橋と並ぶ花街を形成した（「コンサイス地名辞典」三省堂）。